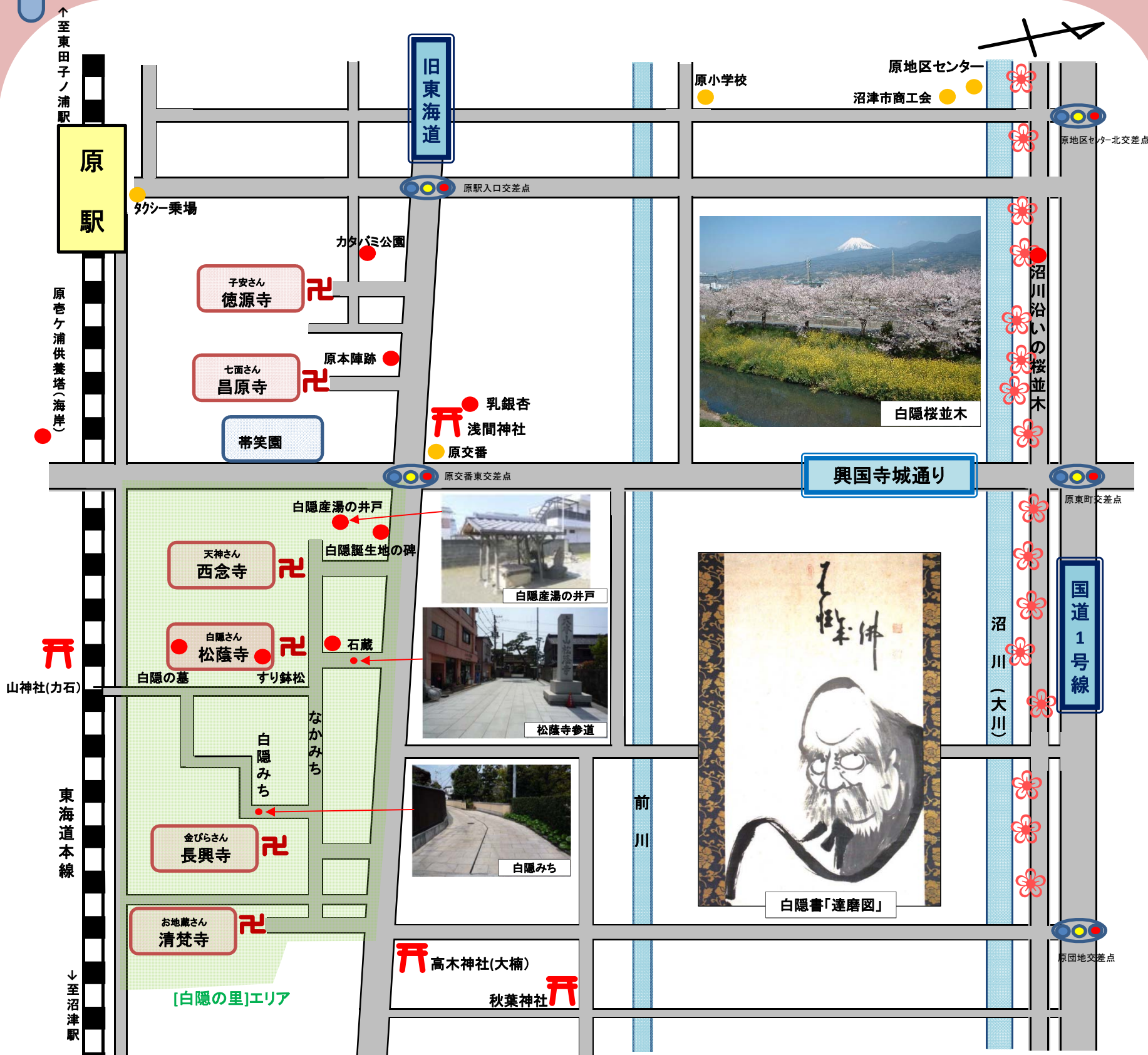


「白隠の里」案内図



モデルコース

- 1 原駅……徳源寺……昌原寺……白隠誕生地碑・白隠産湯井戸……西念寺……松蔭寺……(白隠みち)……長興寺……清梵寺 (約3km)
- 2 原駅……徳源寺……昌原寺……白隠誕生地碑・白隠産湯井戸……西念寺……松蔭寺……(白隠みち)……長興寺……清梵寺 (約5km)

●「白隠の里」整備事業

原地区に残る名僧白隠禅師にゆかりのある歴史的地域資源等を活用して、趣ある住環境の整備により、快適な歩行空間や沿道景観を創出して、市西部地区の交流人口の拡大に寄与することを目的として、原駅東側の約9.5haを「白隠の里」地区と位置づけ施設整備が行われている。

●白隠禅師

「駿河には過ぎたるものが二つあり 富士のお山に原の白隠」



白隠禅師 木像

東海道原宿に生まれ、各地を行脚した後に故郷に戻り、50年近くにわたって松蔭寺の住職を務めました。また、50代以降には、請われて各地で講義を行うとともに、膨大な著作や書画を残しており、終生にわたり、様々な方法を駆使して法を説きました。

人の往来が激しい東海道の沿道で、時代に即応した禅を広めた僧として知られています。松蔭寺には遷化の翌年に完成した白隠禅師坐像があり、虎視牛行(こしぎゅうこう)と言われる鋭さと厳しさを感じることができます。

●松蔭寺

開創は、弘安2年(1279)鎌倉円覚寺開祖佛光国師の法嗣天祥西堂の開基、江戸時代に白隠慧鶴が住職を務めた寺として知られる。現在は、白隠宗の大本山である。

慶安年間に興津清見寺大瑞和尚が復興して中興開山となり、5代目住職を白隠慧鶴が、次いで遂翁元盧が住職を務めている。

白隠は享保2年(1717)に住職となり、翌年34歳の時、花園第一座(住職になれる資格の位)となった。

その後、松蔭寺には全国から雲水が訪れ、多くの僧が松蔭寺で修行したことが知られている。



松蔭寺 山門

白隠は明和5年(1768)84歳で入寂し、境内に墓がある(県指定史跡)。また、松蔭寺には、白隠が岡山城主池田侯から贈られた備前焼のすり鉢を、大風によって折れた松の枝に雨除けにかぶせたという「すり鉢松」があったが、平成22年に枯死して伐採した。備前焼のすり鉢は宝蔵庫に収納されている。

山門は木造平屋、石瓦葺き、石瓦108枚を用いて葺かれており、人間の煩惱の数と同じで、「煩惱は、此処で止めよ。」との教示である。全国でも他に類例を見ない建造物である。

<周辺の見どころ>

●徳源寺

臨済宗妙心寺派 建久4年(1193)源頼朝が行った富士の巻狩りの際に陣屋がおかれた。その後「今津寺」という律宗の寺院を経て、鎌倉円覚寺開祖仏光国師(無学祖元禪師)の弟子帰化僧賢宗が、北条時宗の帰依を受けて弘安元年(1278)に護国禪寺として徳源護国禪寺を創建。賢宗は、円覚寺建立に尽くし、光厳天皇より勅諡円満護国禪師という禪師号を賜った。円覚寺派を経て戦国時代には、吉原宿今泉にあった今川家公寺善徳寺の末寺となり、その後承應3年(1654)妙心寺派中本山興津清見寺の松巖宗密老師を拝請し準開山とし、清見寺末寺となり妙心寺派となった。徳川幕府より御朱印(14石)を賜り御朱印地となり、徳川家康はじめ徳川幕府歴代将軍をまつている。庭は、東海道の名園と言われた原宿の有徳家植松本家の菩提寺であり「帯笑園」の名残を残す富士山の溶岩の庭「対笑園」がある。



徳源寺



昌原寺



西念寺



長興寺



清梵寺

●昌原寺

日蓮宗 大仙院日耀の開山。開基は、徳川家康の側室、お万の方(養珠院日心大姉)である。元和元年(1615)春、東海道原宿の渡辺本陣にお万の方が宿泊された際、南無妙法蓮華経のお題目が聞こえてきた。ただちに本陣渡辺八郎左衛門を伴い庵に入り読経を聴聞されたのち、庵の地主、庄司七左衛門を呼び、この地に一山を構えるように要請した。お万の方より寄進された日蓮聖人の御真影「自点眼尊影」は、失火により寺が全焼した際も原形のまま発見され、現在寺宝となっている。白隠禪師が幼少のころ、説法で地獄の話の聞き仏門に入るきっかけとなったのが、この昌原寺です。

●西念寺

時宗。弘安年中(鎌倉時代)宗祖一遍上人弟子素現の開創。以前は山門・観音堂等があり、望海景勝の寺であった。浮島原に常休庵・休心坊などの末寺もあったが、延宝年中火災により堂宇等を焼失し、明治26年鉄道火災により本堂等類焼する。現在の本堂は大正15年に建立。白隠禪師生家の南側にあり、境内には白隠禪師が幼少のころ毎日参拝した天満宮の御堂がある。

●長興寺

臨済宗妙心寺派。約640年前、康安年間(室町時代)のこと、鎌倉建長寺の開山、大覚禪師の弟子の友獄和尚が行脚中に原の浜辺に差し掛かった時、海の響きに感応道交して心身脱落、歓喜雀躍して念持仏の虚空蔵菩薩を奉安し一堂宇を建立したといわれている。

白隠禪師の時代には松蔭寺での修行僧が宿坊として使い、松蔭寺から長興寺まで通った道が今も残っており「白隠みち」と称されている。

●清梵寺

臨済宗妙心寺派。今からおよそ1200年前、安房の国に帰国の途中得萬長者がこの地で息を引き取り、大きな塚に葬られました。それからこの地が大塚と呼ばれるようになったといわれている。この長者の死を知らされた妻は、梵貞尼という尼になり、夫の死んだ原宿を訪れお墓参りをしました。この時休ませて戴いた網元の網になき夫が朝夕拝んでいた地蔵菩薩がかりました。これを知った網元は心打たれ自ら清信禅居士と号し、梵貞尼と力を合わせてお堂を立てて地蔵菩薩の尊像を安置しました。そしてこの地に山号を得萬山とし、清信と梵貞から2文字を取り「清梵寺」としてお寺を建立しました。

恒例の地蔵尊縁日は、毎年「海の日」に開催され、白隠禪師書の「地獄極楽変相図」が展示されます。

●帯笑園

帯笑園は、原の素封家植松家が江戸時代後期から昭和初期まで代々伝えた庭園である。帯笑園という名前は、寛政3年(1791)海保青陵(儒学者 1755~1817)によってつけられ、高島秋帆(高島流砲術の創始者 1798~1866)筆の木額が残っている。

帯笑園は、一般的な庭園とは違い、珍しい植物のコレクションを陳列し、当時には珍しい温室を備えるなどして、その時期に一番良い状態の植物を鑑賞できる植物園のような性格を持つ庭園だった。代々風流を好む植松家当主は、庭の中心に「望嶽亭」と名付けられた茶室を設け、そこから見える富士山と庭の眺めを楽しんだ。東海道の面した立地条件から、江戸時代には街道を行き交う大名から庶民までが、明治以降も政治家や軍人たちが数多くこの庭を訪れ賞賛している。中でも文政9年(1826)に訪れたシーボルト(ドイツ人医師 1796~1866)は、『日本参府紀行』に「今迄日本にて見たるもののなかにて最も美しく、また鑑賞植物に最も豊かなるものなり」とその美しさを讃えている。また植物観賞もさることながら、江戸時代には江戸と大坂の文化交流の拠点としての役割を果たしていることが、保存されている文書、書画などから窺える。

植物を主体とする文化財のため、当時の様子を示す構成要素はあまり残っていないが、園を訪れた人々の芳名帖、観覧のお礼に送られた書画、植物の管理・配置に関する文書等、数多くの資料が残り、原という一地方都市に日本中から訪問者の絶えない庭園があったことに、あらためて驚かされる。

平成24年9月、国の登録文化財になった。

●原宿(本陣跡)

幕領で、葦山の江川代官の支配下にあった。本陣は西町に1軒、脇本陣は東町に1軒あった。旅籠屋も25軒ほどあったが、その後、天保9年(1838)に火災の被害にあっている。また、この場所は慶長年間に起きた高潮の被害により、現在の旧国道1号線(県道富士清水線)付近から移動したといわれている。宿の範囲は『宿村大概帳』によると、今沢村境より一本松新田まで(大塚神明神社東から富士浅間神社西まで)、宿往還の長さは24町42間とある。家数398軒ほどであったという。

●壱ヶ浦供養塔

江戸時代の天保12年(1841)3月に、原壱ヶ浦漁業の守護神として建立されたものである。当時の漁業者は水難者を丁重にまつことが豊漁と人々の幸せにつながるという信仰を持っており、その信仰により建立されたもので、石に刻まれた寄進者の中には地元の漁業関係者のほか、広範な地域の人々の名が刻まれている。

なお、当時の記録が原宿渡辺八郎家文書に残されている。

●白隠桜並木

国道1号沿線(沼川沿い)の約5kmの区間に約600本ものソメイヨシノが咲き誇ります。沼川沿いには沿道があり、散策しながら桜を楽しむこともできます。この桜は、白隠禪師生誕300年祭に記念植樹した由来で、「白隠ざくら」と呼ばれています。

(情報) トイレ設置箇所: 原駅構内・原地区センター・沼津市商工会

(問い合わせ)

沼津市役所 都市計画部市街地整備課

☎055-934-4763

